

文献紹介

金田章裕 著

『叢書・地球発見15 タウンシップ 土地計画の
伝播と変容』

ナカニシヤ出版 2015年1月 214頁

2,000円+税

いまどきタウンシップといえば、Google Playの人気アプリ“Township”のことを指すらしい。その紹介サイトはこう呼びかける。「君が住みたい理想の町のイメージをシェアしよう！町を発展させるために、作物を収穫し、加工するための施設を動かして、品物を売ろう。鉱山を探検して素材を手に入れ、古代物質を集めよう。カフェや映画館などの公共の建物を開いて、住人達がいきいきと暮らせるような町を作ろう。」

実際に試したことはないが、そのようなストーリー展開が楽しめるなら、あながち荒唐無稽なゲームではなさそうに思われる。祖国イギリスを離れ、アメリカ合衆国やカナダ、オーストラリアの新天地を目指した開拓移民の多くは、貧困からの脱出という契機であったにせよ、農業生産を基盤とした理想の町づくりを夢見たに違いない。

私たちが抱くタウンシップのイメージは、高校の地理教科書に載る正方形区画である。一辺6マイル（1マイル＝約1,600メートル）の区画をタテ・ヨコに6分割して1～36のセクション番号を付し、さらにその一辺1マイルのセクションを「田の字型」に割った1/4平方マイル（160エーカー＝約64ヘクタール）を農家1戸分とする。規模はずいぶん違うが、古代条里地割の6町×6町の「千鳥式坪並」を彷彿させる36分割に意外な共通性を感じ取った歴史地理学者も多いと思う。

ただしこのような区画は1785年の「土地法」にもとづく統一的規準であり、それより古いタウンシップの語は必ずしも正方形区画を意味していたのではない。金田氏によれば、16世紀イングランドの行政資料に「耕作する耕地と、そこに乳牛・肉牛・羊などを飼うことのできる共同放牧地」（本書19頁）と規定されるように、「農村コミュニティの領域を強く意味する用語」（同）であった。そしてメイフラワー号移民団の舞台となったマサ

チューセッツ湾植民地でも、1630～40年代に「タウンが社会的・政治的単位、タウンシップがその領域として認識されるようになった」（18頁）とされている。

紹介の順序が前後したが、本書は「序」以下、大きく5章に分かれる。

- I 英国領北米植民地の土地区画
〔9～60頁〕
- II アメリカ合衆国のタウンシップ
〔61～94頁〕
- III カナダの領主制とタウンシップの土地区画
〔95～118頁〕
- IV 英国におけるタウンシップの変容
〔119～134頁〕
- V 太平洋西方へのタウンシップの伝播
〔135～200頁〕

そこで各章にしたがって、目にとまった箇所を簡単に紹介しておきたい。第I章は「1 ニューイングランドへの入植」「2 中部大西洋岸の植民地」「3 南部大西洋岸の植民地」からなる。入植初期にはオランダ領・フランス領も錯綜していたこの地域の事例を地図で示しながら、金田氏は全体的な特徴をこうまとめている。「大西洋岸における初期の英領植民地では、統一的・規則的基準がなかったために、このような状況（評者注：不定形な土地区画）の出現が不可避であった。方形を志向したニューイングランドのタウンシップにおいてすら、初期の段階では同様であり、その形状は多くの場合不規則であった」（58頁）。

第II章ではアメリカ合衆国独立宣言以後の事例「1 西部（ウェスタンランド）」「2 統一的タウンシップシステム」を扱う。「土地法」による6マイル四方のプランの決定（69頁）、さらに1862年の「ホームステッド法」（自営農地法）以後は、小規模自作農を奨励する目的で160エーカーを入植者に無償で払い下げた（88～89頁）。金田氏は「要するにタウンシップは、土地測量と土地区画設定の呼称や単位としての規則性を強めるとともに、共同体ないし行政体としての側面を失い、6マイル四方の土地区画の単位として、その内部の1マイル四方の土地区画とともに、規則性を強め

つつ一般化し、展開した」(95頁)と総括している。

第三章では「1 ロウワーカナダ属州」「2 アッパーカナダ属州」の違いが強調される。前者はセントローレンス川の河口に近い下流部、後者はオンタリオ湖に近い上流部を指す。この地域は17世紀以降フランスによる植民が併行しており、イギリスのケベック属州となって以後も、1791年の法律によって前者はフランス語圏、後者は英語圏と策定されていた。前者では「川沿いに短辺を接した長大な地筆と、列状に点在する村落」(102頁)が、イギリスと異なる経営理念を反映させた「フランス式」の特徴を有していた。これに対し後者では一辺6~10マイルの方形タウンシップを持ち、タウンシップ内部は条里地割に見られる一町(約109m)×1/10町の「長地型」のような細長い区画に仕切られていた。オンタリオ湖岸の「長地型」が「半折型」に転じる過程など、金田氏が展開するアナロジーはじつに精緻である。

第四章は再びイングランドに戻り、「1 イングランドにおけるハンドレッドとワッペンテイク」「2 イングランドにおけるパリッシュとタウンシップ」「3 ウェールズ、スコットランド、アイルランド」に分けて解説がなされる。キリスト教の教区であったパリッシュが1601年の「貧民救済法」をきっかけに行政区へと変質し、より小さな区画であるタウンシップとヴィレッジに「二人以上の貧民救済委員」(124頁)を置くように決められたことは、タウンシップの行政機能を理解するにあたり重要な認識であろう。

第五章はいよいよオーストラリアの事例が紹介され、「1 オーストラリア東部」「2 オーストラリア西・中部」、さらに「3 北海道で受容したタウンシップ」へと議論は展開する。金田氏の前著『オーストラリア歴史地理』(地人書房、1985年)、および『オーストラリア景観史』(大明堂、1999年)は、追手門学院大学「オーストラリア研究所」の共同研究をきっかけに、長年にわたって積み重ねられた分厚い実証作業の成果であり、本書でもフィールドワークの真骨頂をなすパートと位置づけられよう。

オーストラリアで1788年に始まった流刑囚移民に対応して、ニューサウスウェールズ植民地では流刑囚男子に30エーカー、結婚する場合は妻に20エーカー、子には10エーカーを加算し、また自由

移民には50エーカーが下付された(139頁)。そして1822年にはアメリカ式のタウンシップが導入される。「将来のために測量・区画されるすべての土地は、正南北・東西方向の長い平行線によって、6マイル四方のタウンシップに区画され、タウンシップはさらに1マイル四方のセクションに細分されて、各タウンシップの北西隅より始まる一から三六の番号を規則的に付す」(143頁)という方針が出されたのである。さらに本章では「町立て用地としてのタウンシップ」(156頁)に言及されているのも興味深い。冒頭にふれた「理想の町のイメージ」がどのように投影されていたのかを、大縮尺の地図で確認してみたくなる。

さて北海道「殖民地」のマスタープランは、1戸当たり間口100間(約180メートル)×奥行150間(約270メートル)=面積15,000坪(5町、約5ヘクタール)の「小区画」、これを6戸分集めた一辺300間(約540メートル)の「中区画」、それをタテ・ヨコ3区画ずつ並べた一辺900間(約1,620メートル)の「大区画」からなっていた。「大区画」は一辺1マイルのタウンシップと近似した規模であるが、北海道においては54戸分に相当する区画であった(184頁)。一言付け加えるならば、このマスタープランは旧樺太植民地(現ロシア共和国サハリン州)にも準用されたので、イギリスに源を発したタウンシップは理念や形を変えながら地球を西に半周以上回ってロシアの領域にまで伝わったことになる。まさに本書のシリーズ『叢書・地球発見』にふさわしいグローバルなテーマである。

このように「新大陸」におけるタウンシップは、実際の土地利用には関わりなく、将来に向けたプラン性の強いものであった。それは同時に大英帝国を体現する実効支配の証しであり、他の勢力や先住民たちを区画外に排除する「目に見える」境界としても機能したと思われる。

日本の条里研究とは異なり、タウンシップの伝播・変質過程はすべて当時の資料によって裏付けが取れる。研究者にとって、議会文書をはじめとする公文書が利用できるのはイギリス連邦史の妙味でもある。それでも大縮尺図や空中写真から地割の痕跡をたどりたいと本能的に反応してしまう歴史地理学者にとっては、上記の前著だけでなく、いまやGoogle MapsやGoogle Earthが強い味

方となってくれる。願わくは、本書に登場する主要地名を巻末一覧図にでもまとめておいてくれれば、それらの検索も容易であった。本書はさらっと書き流した概説書ではない。限られた紙数に圧

縮された気宇壮大なタウンシップ・ストーリーを「解凍」するには、アナログながら地図帳片手の照合作業が必須であろう。

(南出真助)